

認証機関に聞く 改訂版対応

リレー連載 第10回

取材先／テュフ ラインランド ジャパン株式会社

(TÜV Rheinland Japan Ltd.)

システム部 マネジメントシステム認証課

シニアスペシャリスト

福田 晃 氏／柴田 檍 氏

移行はMSと事業との統合を確認できるいい機会 EMSは「社会的責任」の視点で見直しを

テュフ ラインランド ジャパンは、ドイツに本社をおくテュフ ラインランド グループの日本法人であり、第三者検査機関としてドイツをはじめ海外へ輸出される工業製品の安全試験・認証の提供を行うと共に、マネジメントシステムについては、欧州最大級の認証機関であるTÜV Rheinland Certのメンバーとして審査・認証を行っている。マネジメントシステム審査の特徴は、プロセス重視とグローバル対応。ISO 9001/14001:2015年版対応について、システム部マネジメントシステム認証課シニアスペシャリストの福田晃氏と柴田檀氏から話を聞いた。(編集部)

規格は「環境リスク」のみではなく「組織のリスク」を要求

－2015年版の「組織の状況」や「リスク及び機会への取組み」といった新しい要求事項に対して、どのような審査をされますか。

規格の要求事項としては、確かに新しい項目ですが、通常、組織では事業計画を立てる時にこういった点を考慮していると思います。ですから、私どもとしては、事業計画などと併せて、組織の状況を踏まえ、リスク及び機会をどのように捉えているかを、審査で見ていくことになります。

ただ、組織でそのように認識されていない場合は、「事業計画では○○についてどのようにお考えですか？ 実はそのことが、ISOの要求事項の『リスク及び機会への取組み』に結び付ぐのではないか』というように拝見した手がかりを示しながら、審査をすることになるでしょう。

特にISO 14001の場合、ご注意いただきたいのは、規格は環境リスクのみではなく、組織のリスクの決定を要求していることです。例えば、環境側面の抽出・特定を今まで通りやっているので、リスクへの対応ができていると考えている組織がありますが、それは環境リスクへの対応であって、組織のリスクへの対応は異なる場合があります。例えば、廃液を流出させてしまった場合を考えると、工場が工業専用地域に立地しているのと、田畠がある地域に立地しているのとでは、組織のリスク対応は異なります。

移行審査のトップインタビューの場面で、組織のリスクをどこまで意識されているのかを確認することもあります。

－「事業への統合」については。

事業計画や事業戦略が、QMSやEMSとどのように結び付いているかについては、従前の審査から聞いていたことです。ですから、改訂版の審査だからといって、特に新し

い視点としてお聞きすることではありません。

これは組織にとっても同じです。品質や環境が事業の重要方針の中に取り込まれている組織であれば、マネジメントシステムの事業への統合化を新たに気にする必要はないはずです。

また、私どもではプロセス重視の審査を行っていますので、あくまで仕事のプロセスの流れに沿って審査していきます。ですから、「6.1 リスク及び機会への取組み」の何項については、このようなアプローチで審査を行うといったような、規格要求事項の順番に沿った逐条審査は、私どもの好みやり方です。

組織は「どこまでやればいいのか」というレベルで悩む

－クライアント向けの2015年版規格説明会を各地で実施されていると思いますが、「組織の状況」「リスク及び機会への取組み」「事業への統合」についての質問が会場から出ていませんか。

出ています。皆様がよくお聞きになるのは、「具体的にどこまでやればいいのか？」、つまりレベルについてです。何をやればいいのかはよく理解されているのですが、それをどこまでやればいいのかについて悩んでい



テュフ ラインランド ジャパン株式会社 システム部 マネジメントシステム認証課 シニアスペシャリスト 福田 晃 氏(右)／柴田 檍 氏

るようです。この質問に対しては、「組織で自由に決めてください」とお答えしていますが、その際に参考になるものとして、規格書の最後に付いている「附属書A」を読むことをお勧めしています。特に、ISO 14001の規格書では、かなり詳細に書かれているので、レベルを考える際に役立つと思います。

—トップインタビューについては、従来と変わることろはありますか。

審査のアプローチは従来とまったく変わりませんが、改訂版ではリーダーシップについてトップに確認する項目が増えていますし、改訂版による移行審査、あるいは初回審査では、要求事項を網羅したいと考えていますので、その意味でもインタビュー時間を若干延ばすことになると思います。

—「パフォーマンス評価」については、どのような審査になりますか。

ISO 14001の場合は、組織として「意図した成果」をどこに置いているか、何を目指しているのかを確認して、それが達成できているかを評価することになります。基本は「意図した成果」を確認することです。それは、組織の規模や業種によって異なります。具体的には、目標管理の仕組みや順法管

理の仕組みなどを見ることになります。

ISO 9001の場合も、基本的にはISO 14001と同じですが、QMS導入の主たる目的が、規格の冒頭にもありますように、「顧客満足度を向上させる」ことですから、「意図した結果」を最終的には「顧客満足度を向上させる」ことに結び付けてパフォーマンスを評価する必要があります。

特徴はプロセス重視審査とグローバルな審査対応

—移行審査を受ける組織に対して一言。

組織にとっては、自社のマネジメントシステムが事業プロセスときちんと統合できているかを確認するいい機会ではないかと思います。事業プロセスとISO認証のための仕事を別々に実施してこられた組織は、そういうことがないように、大きな見直しが必要になってくるでしょう。一方、統合をすでに実現されている組織にとっては、今回の移行のために、それほど大きなシステムの変更は必要ないかもしれません。

ISO 14001については、社会的責任の視点でシステム全体を見直すいい機会です。自社で決めて実施すればよいというわけではなく、世の中の流れや周りをよく見ながら、社会的責任を常に意識して、課題やリ

スクなどを特定しなければなりません。そのような仕組みになっているかを、移行を機にもう一度見直していただきたいと思います。

—最後に、テュフ ラインランドの審査の特徴について。

今回の規格ではプロセスアプローチがより強調されていると思いますが、私どもとしては従前からプロセス重視の審査を実施していました。プロセス審査とは、組織の仕事のプロセスに沿って順番に審査して行くやり方です。例えば、営業や受注から始まって、設計、製造、出荷まで見ていきながら、途中のフィードバックもチェックします。規格要求事項と照らし合わせながら見ていく逐条審査は行っていません。

もう1つの大きな特徴は、世界69カ国に拠点を持っているので、グローバルな審査対応ができます。例えば、日本企業の拠点が海外にある場合、海外の審査は日本からではなく、現地のテュフ ラインランドの拠点から審査に行きます。法規制などの現地情報をよく理解した審査員が向き、現地語で審査を行います。組織では、世界全拠点の審査結果を把握でき、それを本社のマネジメントレビューのインプット情報として取り込むことができます。▼

(取材日:2016年6月17日)